特集 「エコライフ」という生活者価値

Ⅲ 「エコライフ」を通して広がる暮らし

エコライフと生活者価値
鈴木 靖文

男の家事をとおして見た実践エコライフ
土井 明弘

手づくり生活のエコロジー
歌野 敬

だれでもできる環境家計簿
本間 都

里山の自然と共生する暮らし
竹田 純一

「エコライフ」とカーシェアリング
福山 峻一

実験集合住宅「NEXT21」における住まい手参加の緑地管理
定國 由

エコライフと生活者価値

鈴木　靖文
Written by Yasufumi Suzuki

自分の力で発電して分かったこと

人間の力でどれだけのエネルギーが生み出されるのだろうか。自分の力で発電して、テレビを映すことができたら面白いだろうな…。そんな素朴な思いから、自転車をこぐ力で発電をしてテレビがつく装置を作ってしまった。

二〇〇二年に日韓共同開催されたワールドカップサッカーでは、街頭で自転車をこいで観戦する企画を行ったが、物珍しさがうけてか、アッという間に人だかりができた。小型のテレビをつけるのにもかなりペダルが重く、たいてい二分こいでいられない。回転が止まると、発電されなくなり無情にもテレビは消えてしまう。観客にも協力してもらい、交代しながら前後半あわせて九〇分間つけることができたが、あの時に筋肉痛になった人も多いのではなかろうか。

ともかく、小型のテレビをつけるだけでも大変なエネルギーが必要なことは、実際に体験してみるとよくわかる。家の中を見回してみると、テレビのように飾っておくだけでは意味をなさず、エネルギー（電気など）を消費してはじめて何かの役に立つ装置がたくさんあふれている。自転車一台で動かすことができるテレビは、むしろ消費エネルギーが小さい部類に入っており、エアコン（六〇〇ワット）を使うためには自転車一〇台、電子レンジ（一〇〇〇ワット）なら一七台、シャワー（二〇〇〇kcal/h）でお湯を浴びるにあたっては、なんと自転車四〇〇台が必要ということになる。扇風機（五〇ワット）をつけるのでさえ一人が必死でこぎつづけないといけないことを想像してみると、ゆっくりと涼んでもいられない。ましてエアコンなどつけようものなら、汗をかいて自転車をこいでいる一〇人の方に、申し訳ない気分にさえなってしまう。知らず知らずのうちに、大変なエネルギーを消費する生活を送っていることになるのである。

そう考えると、人力で十分涼むことができる「うちわ」は、えらく効率的に設計された装置であると感心してしまう。ましてや全く力を使う必要がない「打ち水」や「すだれ」など活用してきた先人たちの知恵には、頭が下がる思いである。

もっとも、使った分の電気代やガス代はきちんと支払っているので、どれだけ多くのエネルギーを使おうが、誰にも文句をいわれる筋合いはないともいえる。ただよく考えてみると、電力会社もガス会社も、自分たちでエネルギーを生産しているわけではなく、単に使いやすい形に転換して供給しているだけであり、光熱費はそのサービスに対して払ったお金にすぎない。

エネルギーを生産してくれた太陽や太古の植物に対しては、私たちは何も責任を果たしていないわけである。せめて「遠慮」しながら使わないとバチがあたるかもしれない。

我が家で「省エネ」に取り組んでよかったもの

「省エネ」というと、テレビやエアコンなどを我慢するなど、自分の生活の便利さを削る一種のケチケチ運動といったイメージでとられることがまだまだ多い。我慢したらその分エネルギー消費が少なくなるし、減らした分の電気代が浮くことも大きなメリットであることは確かに違いない。しかし便利に利用しているものを減らそうというのは苦痛でもあり、追求していくと限りなく不便な生活を求められるようで、心配にもなる。一時的にはできたとしても、継続は難しいであろうし、ましてや他の人に勧めようという気にはなかなかならない。

仕事柄、省エネについて調べているが、簡単で効果的な削減対策が、世の中には結構転がっているものである。我が家でも取り組んでよかったものを三つ紹介したい。

まずは省エネ型の製品を選ぶということである。電器店にいくと「省エネ型」の機器が花盛りとなっている。以前の機種に比べて大幅に省エネとなっており、エアコンでは一〇年前の半分、冷蔵庫では七分の一になった機種も出回っている。高性能機種に買い替えた人に聞くと、電気代が安くなったという声もよく聞く。国の温暖化対策の中でも、電気機器の省エネ化が、家庭部門での主要な柱として位置づけられている。

我が家でも三年ほど前、一〇年間使っていた小型の冷蔵庫が壊れた時には、ここぞとばかり当時最高性能のものを選んだ。そろそろ結婚かなという思惑もあり、大型のものを選んだが、冷蔵庫については大型の方が、作りがよく、消費電力量が少なくなっている。断熱がしっかりしているせいか、冬季にはほとんど動いていないほどである。カタログ値で年間電気代は六九〇〇円であったが、店頭ではその倍以上電気代を食うものも並んでいた。家で何も気にせず使いながら、それでいて電気を半分にするほどの省エネができるというのは楽なものである。もし電気代の高い方を買っていたら、現実的ではないが二日に一日は冷蔵庫を止めないと、同じだけの省エネにならないのである。

惜しむらくは、その後、さらに省エネ型のものが開発され、購入した機器に比べて半分の消費電力のものが出回ってしまっているのである。しかもノンフロンタイプである。もう少し我慢していたらよかったと残念にも思うが、買ってしまったものは仕方ない。

サッカーワールドカップの自転車発電による街頭応援（2002年）

店頭で並んでいる全機種が省エネなら問題がないが、普及機といわれる安価な機種も店頭には並べられている。カタログを見れば、どれだけ省エネなのか比較はできるが、消費者にとっては少し敷居が高い。そこでAAAからCまでわかりやすい五段階のランク表示を含めたラベルを作ろうと、東京や京都から試みが始まっている。今年は協議会もできて、全国的に展開していく予定となっている。まだ使える機器まで買い替えするのはごみ問題の視点などから望ましくはないが、どんな家庭でも一〇年以内には、何かしら買い替え時期を迎えるはずで、その時にはラベルが参考になると期待している。

また、販売価格は高めかもしれないが、毎年電気代が安くなる分、高性能型の方がトータルで安くなることもある。ふだん努力しなくても環境対策になり、家計に得になるという、お勧めの取り組みである。

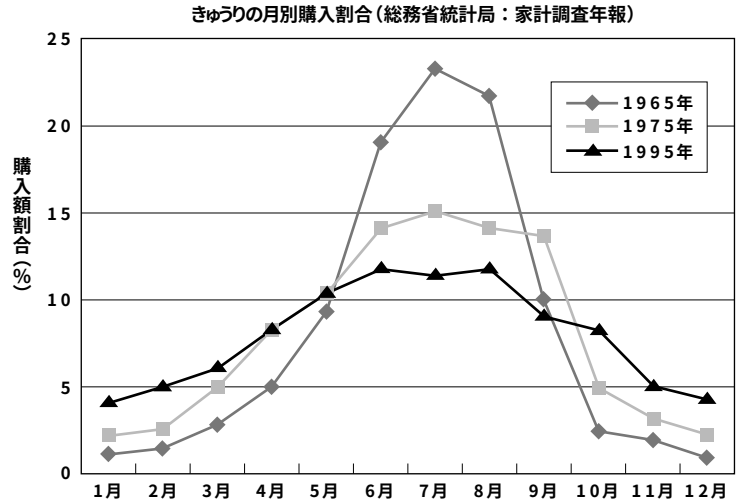
季節や自然にあった生活をしよう

省エネのもうひとつの視点は、季節や自然にあった生活をしましょう、ということかなと考えている。

図に示したのは、家計調査を基にした、月別のきゅうりの購入割合である。一九六五年ころにはもっぱら夏に消費され、冬にきゅうりを食べることはしなかった。しかし一九九五年になると夏のピークが小さくなり、冬にも一定購入されるようになり、いわば旬がなくなってしまった。

きゅうりは、そもそも夏に実るものであり、冬に収穫しようと思ったら、ハウスを用意して暖房しなくてはならない。その分だけ余計にエネルギーがかかることになる。夏のきゅうりに比べて、冬のものは五倍近くもエネルギーがかかっていると推計されている。きゅうりは夏に食べる方が省エネというわけだ。

しかしそれ以前に、旬のきゅうりの方が安く、栄養があって、体にもいい。体を冷やす役割もあり、夏に食べるのは理に適っているのである。



日本人は年中いつでも食べるようにする方が便利で快適な生活だと考えてきたのであろうか。しかし体にとって不自然な季節にあわない生活をしようとするから、余分なエネルギー消費が必要になっている面もある。

何も肩肘張って省エネに取り組もうと考えなくても、季節にあった食べ物を食べ、季節にあった生活をすることが省エネの近道ともいえる。考えてみれば、夏は暑く、冬は寒いのが当然であり、それを無理に年中同じような室温にして過ごそうとするから余計なエネルギーがかかっているのだろう。夏は暑くて仕事にならないというのであれば、仕事はしないという選択肢があってもいいだろう。炎天下に木陰で休んでいる犬や猫を眺めていると、人間と比べてはるかに快適な生き方をしているようにも思えてしまう。

お勧めの省エネの最後は、家族がいっしょに過ごすということ。バラバラだと、それぞれの部屋で照明をつけ、冷暖房する必要があり、エネルギー消費も必然的に増加する。省エネというだけではなく、いっしょに過ごすことで、何か家族で「いい関係」が始まるかもしれない。CEL

◇鈴木　靖文（すずき・やすふみ）
（有）ひのでやエコライフ研究所代表取締役。一九七一年生まれ。専門は廃棄物問題、省エネ。著書は、「温暖化を防ぐ快適生活」（CASA編　かもがわブックレット）、『まんがで学ぶエコロジー』（共著　昭和堂）など。